

本多光太郎先生が残された強力なミームと私

岡 部 徹

「ミーム」(meme)という言葉は、オックスフォード大学の生物学者リチャード・ドーキンス (Richard Dawkins) が、1976年に彼の著書「利己的な遺伝子 (The Selfish Gene)」の中で作り出した造語です。模倣を意味するギリシャ語の mimema をもとに考え出されたものですが、生物学的な「遺伝子」(gene) とは異なり、定義上は「遺伝子によらず、模倣によって人から人へと伝えられる情報の単位」ということになるのでしょう。この概念は「文化の伝達や複製の基本単位」として拡張され、生物の個体間で伝達する遺伝子に対して、「文化的遺伝子」という意味としても用いられています。ミームは情報や理念などを運び、遺伝子と同様に、ミーム同士が弱肉強食の自然淘汰を行い、次世代に生き残る強いミームを残していきます。私達は、これらの情報を運ぶミームのキャリアであり、ミームを伝達することで、時間・空間を超えて他者と意識的、無意識的に文化や概念を共有することができます。このように、ミームの伝達によって、アイデア、データ、情報、知識、知恵、さらには文化・思想までもが形成されますが、必ずしも良いことだけがミームによって伝達され繁栄するわけではないようです。

さて、本多光太郎先生と私とは生きた時代が100年近くも離れており、研究環境や専門分野などあらゆる状況が異なるため、残念ながら「材料の研究者」という以外に見かけ上の共通点はありません。今回の特集では、没後50年を記念して「本多光太郎特集号」を企画されたようですが、50年前のこととなりますと原稿の依頼先が年配の大先生方ばかりになってしまいますので、今回は無理をしても若い世代の研究者からも原稿も集め

ることになったようです。そこで若輩の私もご指名を受けたわけですが、金研に在籍したことがなく、また、鉄鋼や磁性ではなくチタンなどのレアメタルの研究を細々と行っている私がいったい何を書けばよいものかと、依頼を受けたときは途方にくれた次第です。正直申しまして、私自身、本多記念会から第14回本多記念奨励賞 (1993年) を戴いた際に頂戴しました石川悌次郎著の「本多光太郎伝」を読むまでは、本多先生のごことはあまり存知上げませんでした。もちろん、有名な磁石材料を発明されたことや、東北大学に多大な貢献をされたことはおぼろげながら知っておりましたが、わが国の材料研究の確固たる礎を築き、また科学界だけでなく今の日本の材料産業界に多大な影響を及ぼした巨人であるとは、不明にして理解しておりませんでした。

ところで、ミームに戻りますと、本多光太郎先生が残された磁性やKS鋼など鉄鋼材料の研究成果の多くは、研究論文などの媒体を介して学術情報というミームとして全世界の研究者・技術者に伝播し、後世に受け継がれ自然科学の発展に寄与したことは疑いの余地はありません。また、本多先生の孫弟子にあたる先生方の多くが、現在の材料科学界の重鎮として活躍されているのも事実です。現在の材料研究分野における高名な先生方は私にとっては王様のような大先輩ですが、その先生方が神様のように敬意を払っておられる本多先生の威光は、世代を超えて私にも伝わってきます。

私のような若輩が本多先生について語るのには僭越とは存じますが、今回、私が注目しました点は、本多先生が残された研究に対する「心構え」や

研友, vol. 61 (2003) pp. 26-27.

「取り組み方」、さらには、「企業家精神」や「材料研究に対するロマン」など、研究成果として学術論文に残らないミームの伝承に関することです。「今が大切」、「つとめてやむな」、「鉄心」、「産業は学問の道場なり」などの本多先生が残された言葉の数々は、まさに先生の強いミームの結晶として表現されているものではないでしょうか。本多先生が残されたこれらの強力なミームの集合体は「本多イズム」と言い換えることもできるのでありますが、実際には言葉では表現できない多くの深淵な事象が膨大なミームとして伝承されているようです。

東北大学、とくに金研に身を置かれる方々の多くは、本多先生が残されたミームを学生の時から無意識のうちに受け継ぎ、当然のように感じられるのかも知れません。しかし、私のように京大、MIT、東北大、東大と3～5年ごとにカルチャーの異なる研究機関を転々としてきた者にとって、この強力なミームは東北大学に赴任して間もなく、鮮烈な印象とともに様々な形で多くの方々から私に伝わりました。私が東北大学に身を置いたのは1995～2000年の5年間という短い期間でしたが、この間、素材工学研究所（現：多元物質科学研究所）の早稲田研究室と梅津研究室の助手として、東北大学の材料研究の独特な文化に接することができたのは、今から思えば大変貴重な経験でした。本多先生の強力なミームは端的に表現できるものではありませんが、研究に対する「今が大切」というミームは、本多先生に関する書物を読み、あるいは講演を聴く度に、確実に私にも継承されていることを認識する次第です。

本多先生が残された強力なミームは、そうたやすく消えていくことはありませんが、冒頭で紹介しましたように、必ずしも良いミームだけが保護されて繁栄するわけではなく、遺伝子と同様に、ミーム同士は弱肉強食の自然淘汰を行い環境に適したミームが次世代に生き残ります。研究のよう

な極めて高度な文化活動においては、媒体となる研究者の質や研究組織がミームの継承・繁栄に大きな影響を与えるのは言うまでもありません。最近の日本においては、見かけ上の成果主義が蔓延し、物事の真理を追求する研究そのものに対する情熱が低下するなど、必ずしも良いミームだけが研究という文化活動に繁栄しているわけではないような気がします。本多先生が残された優れたミームを継承し繁栄させていくには、研究の本質を追究し発展させようとする質の高い伝承者と環境が必要です。

東北大学、とくに金研を中心とする世界に冠たる材料研究のメッカでは、こうした真の研究者としてのあり方を追求する本多先生が残されたミームは、没後50年経った今でも強く息づいております。しかし残念ながら、かつての私がそうであったように、最近の若い研究者はこの強力なミームの発生源である本多先生について多くを知らない人も多いと思いますので、本多先生の偉業をあらためて再認識する必要があるかもしれません。東北大学におかれましては、本多先生が残された強力なミームを誇りに思い、発展、継承され、今後も世界最高水準の研究機関として社会に貢献されることを切に祈ります。

私も東北大学に身を置いた者として、今の職場でも本多先生が残されたミームを少しでも研究仲間や学生に伝えることができればと思って努力しております。私自身は、「産業は学問の道場なり」という本多先生の言葉を少しでも達成できるように、レアメタル産業に私の研究成果が活かせる日が来ることを目指して今後も精進していくつもりです。東北大学からは離れたところで、微力ながらも本多先生のミームを少しでも強力な形にして伝承・繁栄できるように心しておりますので、今後とも皆様のご指導を賜りたくこの場を借りてお願い申し上げます。